郷土ちがさき

第 143 号
発 行　平成30年9月1日
発行者　茅ヶ崎郷土会
会 長　平野文明
編集責任　平野文明

特集　二十三ヶ村調査勉強会　中島村 …… 2
村を知る手がかり　小川正恭 …… 3
史跡・文化財めぐり報告他　源 邦章 …… 8
風　自由投稿欄　浜降祭　中島幸子 …… 20
民俗資料館旧藤間家住宅　富永富士雄 …… 21
馬入の渡の図　新編相模国風土記稿 …… 27

ワクワクしますか？

ラジオで言っていました。

「ワクワクすると血のめぐりが盛んになり、血圧は安定し、食欲は増し、便秘は治り、ぼんやり見えていた目がはっきりし、駆けだしても息は上がらず、十歳は若返りますよ」

ウーム　自分は毎日ワクワクしているだろうか。

今、食べたいものは何だ？　ウナギは貴重品になって高いし、そうだ三陸沖のホヤだ。着るものは？　ウオーキングシューズに穴があいている。買いに行こうっと。お友達はどうでしょう。昔お会いしたご婦人方ですか？　皆さん、お年をお召しのことと思いますが、お会いしてみたいです。ミュージックは？　これは井上陽水先生に限りますな。九州生まれの九州育ちだし。

おっ、だんだんワクワクしてきたぞ。

茅ヶ崎郷土会はどうでしょうか？

こりゃむずかしい。入会したとたんココロ　ワクワク。そんな郷土会がいいなぁ…。

平成三十年九月　茅ヶ崎郷土会会長　平野文明

特集　二十三ヶ村調査勉強会　中島村

平成二十九年度四月から始めた茅ヶ崎市中島の歴史調査勉強会は、ほぼ月に二回ずつ活動日を持っていますので、三〇回を越えました。

茅ヶ崎郷土会とちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会との共同事業です。市内にある江戸時代の村、二十三ヶ村の歴史を調べて、書き残そうという目的ですが、歴史学の専門家はいないので、まさに勉強を重ねながら進めるというやり方です。

しかし、それなりに楽しみながら回を重ねていて、今年の十月に予定されている茅ヶ崎市文化祭に参加し、その一部を展示しようと思っています。ようやくまとめの段階に入りましたので、ここにその一部を紹介いたします。

以下述べますことは、まとめ方のおおよその見通しです。作業が進むにつれて変わるところがあるだろうことをお含み置き願います。

（二十三ヶ村調査勉強会参加者一同）

中島の歴史　構成案

第一章　絵図と地図に見る中島の移り変わり

第二章　中島の歴史　解説

01 中島　地名の由来
02 中島の範囲
03 地名と小字
04 『新編相模国風土記稿』に書かれている中島
05 『国誌下調』（皇国地誌）に書かれている中島
06 相模川
07 相模川（鎌倉時代の記録）
08 相模川（戦乱の記録）
09 古相模川（いかだま）
10 小出川
11 中島村と領主山岡氏
12 浄林寺の元和九年銘供養塔
13 馬入の渡　その位置
14 記録に残る馬入の渡
15 馬入の渡　船橋（浮橋）
16 馬入の渡　渡し場を整備する
17 馬入の渡　定掛り・定助郷・加助郷の村々
18 馬入の渡　渡船賃
19 馬入の渡　川止め
20 馬入橋
21 矢島橋
22 鎌倉道・東海道・殿道・河岸道
23 状部屋
24 明治時代を迎えて　村の仕組みの変化
25 水害と堤防建設
26 中島の子どもたちと学校

27 加藤福太郎君の碑
28 石上巡査と中島
29 関東大震災と中島
30 中島仮駅
31 平塚空襲と中島
32 忠霊塔と戦没者
33 浄林寺
34 日枝神社・大山不動尊・梵鐘
35 八坂神社
36 右近左近稲荷
37 中島の政治家
38 大川と大川淵・浄林寺ダブ
39 地図に見る地形の変化
40 中島にあった商店
41 やなぎ屋
42 サカタのタネ
43 守山牧場
44 湘南シーサイドカントリー倶楽部
45 中島中学校
46 産業道路
47 中島親水公園
48 自治会館
49 中島の農業
50 チョウナイとサイノカミの祭り
51 チョウナイと講中
52 家を継ぐということ
53 伝説（何時橋のはなし・大蛇の引っ越し）
54 中島の石仏
55 中島の歴史　参考図書一覧
56 中島に関する図書　中島真平著『郷土中島を語る』
57 中島に関する図書　加藤万吉著『仍って件の如し』
58 中島に関する図書　清水洋一著『残照余情』
59 中島に関する図書　根本康明著『茅ヶ崎春秋』　など

第三章　中島のむかし　聞き取り集
第四集　中島歴史年表

右にあげた第二章中の五九項目の中から、１地名の由来、１３馬入の渡　その位置、３７中島の政治家、４７中島親水公園の四項目を原稿化したので次に掲げます。

０１　中島　地名の由来

中島という地名は、江戸時代の「中島村」の村名に由来している。この中島村の範囲は今の茅ヶ崎市中島の範囲と大きくは違ってはいないと思われる。

豊臣秀吉の命令によって徳川家康は、小田原北条氏が滅亡したあとを治めるために、天正十八年（一五九〇）に江戸に移ってきた。翌十九年、家康は旗本達に江戸近郊の村々を安堵していくなかで、中島村を山岡景長にあてた。茅ヶ崎市史

一巻一七三頁に近世編一号資料としてこの宛行状が掲載されている。「相州東郡に属する中嶋之郷（村高八〇石四斗）と懐島之郷（浜之郷村のこと、村高二一九石六斗）を山岡庄右衛門どのへ与える」と書いてある。「中嶋之郷」とあるが、中島村のことである。中島村がはっきりと登場する資料である。

実はこの資料の前に、小田原北条氏の時代、永禄十年（一五六七）に「北条氏康、中島郷の当年永銭の納法を定める」と樋田豊宏さんの『茅ヶ崎寒川歴史年表』にある。この永禄年間の中島郷も天正十九年の「中嶋之郷」、そして現在の中島の範囲と大きな違いはないものと思われる。

これらの中島（嶋）郷（＝中島村）とはいささかおもむきの異なる「中嶋郷」がまた別にある。

「相模国封戸租交易帳（さがみのくにふこそこうえきちょう）」という史料がある。奈良時代の初めのころ、今から一三〇〇年近くさかのぼる天平七年（七三五）閏十一月十日の日付をもち、この中に「右大臣藤原武智麻呂の食封（じきふ）として大住郡仲島郷　五〇戸、田二一六町七反三四二歩不輸租田二七町四反二二二歩」と書かれている。

また、それから二〇〇年くらいあとの平安時代の承平年間（九三一から九三八年）に作られた「和名類聚抄」（わみょうるいじゅうしょう　以下「和名抄」と記する）には大住郡内にあった郷をあげる中に「中嶋郷」が登場する。大住郡のことだから、茅ヶ崎市史には載せられていない。

奈良・平安時代の記録に「大住郡中島（嶋）郷」とあり、戦国時代の末期に「東郡（後に高座郡となる）　中嶋之郷（＝中島村）」が現れる。

ここで問題が発生する。古代の「大住郡中島郷」とそれから約六百数十年後の「高座郡中島村」はどのような関係なのだろうかという問題が。

このことに関する諸説を紹介しよう。

まず『新編相模国風土記稿』の「村里部　大住郡巻之一図説」（大日本地誌大系二〇　雄山閣版同書二巻三三〇頁以下「風土記稿」と略記する）には、和名抄所載の一四郷を述べる中で、

中島　今、隣郡高座に中島あり、これ遺名なるべし、その地は相模川を隔て当郡（注　大住郡の事）に隣りたれば、川の変遷によって、彼の郡（注　高座郡）に入りしならんとある。高座郡の中島村の村名は、和名抄に載る大住郡中島郷の郷名の「遺名」であり、大住郡内にあったものが高座郡内に移ったのは、相模川の流路の変化に依るとしている。古代の中島郷の位置に江戸時代の中島村があり、中島村の名は中島郷の名前に基づくという解釈である。

次に、明治三五年に刊行された歴史学者邨岡良弼（むらおかりょうすけ）著『日本地理志料』巻一五相模国の中の一二丁に大住郡についての記述がある。それは、

中島　訓欠（読みを欠く）、尾張の中島郡の例に依るに奈加之萬（なかしま）と読む。信濃、筑前にまた中島の郷あり。けだし相模河の内に在るに因る名。

とあり、続けて「封戸租交易帳」と『風土記稿』の先の文を載せる。古代の大住郡中島郷は「なかしま」と読み、相模川の中にあるので、「中島」なのだといっている。さらに中島の東側に古相模川があってこれが中島を囲む古い「川道」で、中島、今宿、柳島、萩園、田端、浜之郷、円蔵は大庭庄

で「其域也」とあり、この七ヶ村が中島の範囲だったといっているようである。

さらにもう一例あげるなら、吉川弘文館刊行の『國史大辭典』の大住郡の項には和名類聚抄の大住郡内の中島を「中島（茅ヶ崎市中島）」と断定してある。辞典の中の短い文章だから説明は省かれているが、大住郡中島郷がそのまま江戸時代の中島村につながっているように受け取れる書き方である。

以上のように、古代の中島郷と近世の中島村は、位置は同じで、所属する郡が違うのは河の流路の変化によるというのが通説である。『日本地理志料』は「中島」の語源に触れて、相模川の河口の流路に囲まれた中島にあったので、「中島郷」と名付けられたとしているのである。

以上の説はもっともだと思われる。

がしかし問題もある。それは両者の面積の違いである。

古代の中島郷は「封戸租交易帳」には、戸数五〇戸、免税地を含めて田畑四三〇町歩ほどがあったと書いてあるが、江戸時代の天保十二年（一八四一）の『風土記稿』中島村の項には「家数五〇」とあり、安政二年（一八五五）の「中島村高家数人別書上帳」（茅ヶ崎市史一巻近世編四一号史料）には「高八〇石、家数三七軒　男八三人、女六七人」とある。古代の広さの単位「町」と近代のそれとは同じかどうか調べていないが、明治一九年編纂の「国誌下調」に載る中島村の面積は、未記載の部分もあるが八一町三八反で、「封戸租交易帳」にある面積の約三分の一である。江戸時代の中島村に比べて古代の中島郷の方が大きいのである。

しかし、『日本地理志料』がいう近世村七ヶ村が中島郷だったとすると、四三〇町歩を越えてしまうだろう。

古代・中世の郷はいくつかの集落を含むことが多かった。懐嶋郷を見てみれば、浜之郷村ほか数ヶ村が含まれている。小田原城を包囲した豊臣秀吉が近隣の各地に発給した天正十八年（一五九〇）四月の禁制には「ふところ嶋三ヶ村」とあり（市史一―一六五頁）、この三ヶ村は「円蔵・矢畑・浜之郷」とされている（市史五―七五頁）。『風土記稿』浜之郷村の項にはこの禁制を引いて、円蔵村から分かれた西久保村を入れて「懐島四ヶ村」と呼ぶとある。また、浜之郷村の記述の中に、鶴嶺八幡社を鎮守とする村は「浜之郷・下町屋・円蔵・西久保・矢畑・松尾・茅ヶ崎七村」ともある（雄山閣版三―二八五頁）。茅ヶ崎村がここに加えられていることは別に考えなければならないが、その茅ヶ崎村を除いて、これらの村々が懐島郷を成していたとも考えられる。

懐島郷の範囲を示す史料がもう一件ある。文永八年（一二七一）五月七日の日付銘のある「二階堂氏所領注文」（市史一―一一四頁　古代中世編一三一号史料）は懐嶋郷の堺を載せるが、その堺は萩曽根（萩園）と柳島との間にあるとしている。

以上のことから考えると、古代末から中世にかけて、中島郷は懐島郷と接していたのではないだろうか。萩曽根、柳島、そして江戸時代に登場する中島村はもちろんのこと、今は相模川の西側にある馬入、須賀なども含んでいたのではないだろうか。相模川の東側（中島側）に昔の須賀・馬入村の土地があることからもそのように考えられるのである。

明治16年測量迅測図『地図集 大地が語る歴史』41頁・44頁合成

相模川河口付近を含む一帯を、明治十五年（一八八二）に測量した地図（茅ヶ崎市史現代7『地図集　大地が語る歴史』四一～二頁）がある。これで見ると、相模川河口一帯の様子は今とはまるで違っている。相模川本流と、地図が作られた頃はもう流れを止めている古い川跡が曲がりくねっている。この一帯は水の害を頻繁に受けて住むことは出来なかっただろう。集落はこのような氾濫原を避けて点在している。古い川跡が本流だったころ、つまり江戸時代を含むそれ以前の頃は、幾本にも分かれて流れる相模川と一体となった「島」地形を成していたことだろう。中島郷はそのような土地の上に成り立っていた。後北条氏の時代に萩園村その他が村として独立していく中で中島も村の形を整えていった。『風土記稿』が記すように、中島村の村名は、古代の中島郷の遺名として付けられたものだと思うのである。

（平野文明　平成三十年八月二十日記）

13　馬入の渡　その位置

江戸時代、大住郡の中に、相模川を渡る渡し場は、幕府公認のものが四か所、農民が耕作のために使うものが二か所あった。

『風土記稿』の大住郡の図説（大住郡巻之一　雄山閣版二巻三四一頁）には、これらはすべて「船渡」であり、

馬入の渡　馬入村―高座郡中島村（東海道にかかる）

田村の渡　田村―高座郡一之宮村（田村通り大山道にかかる）

・藤沢宿と中原宿を結ぶ）

戸田の渡　戸田村―高座郡門沢橋村（大山道の柏尾道にかかる）

岡田の渡　岡田村―高座郡社家村（岡田村持）

加えて農民私設の渡しが四之宮村と大神村にあったと記されている。

まず、相模川について『風土記稿』（巻之五十九　村里部高座郡巻之一　雄山閣版三巻　二六二頁）の高座郡図説には次のように記してある。

○相模川　国中の大河なればこの名を負へり。郡の北方田名村と愛甲郡角田村の境を南流し、中程より大住の郡界となり、次第に曲直南流して東海道を横切り〈この辺馬入川ととなう。対岸に大住郡馬入村あり〉柳島村と大住郡須賀村の境にて、海にそそげり〈この辺中流に洲ありて二流となる、洲の西を流るゝを本流とし、洲よりこの方は当郡に属す、この流を古相模川とよぶ、また大住郡、馬入・四之宮・須賀三村の地、川を隔て本郡中にあるは、水溢の時水路変易によって、郡界を改めしゆえなり〉

先に記したように『風土記稿』大住郡図説には、馬入の渡が馬入村と中島村の間にあったとする。まずこのことについて考えてみる。

明治十五年（一八八二）測量の地図（『地図集　大地が語る歴史』四一、四四頁）で、相模川河口付近を見てみると、中島村の集落のすぐ西側に馬入村との村境がある。川の流れはそこよりずっと西にあり、広い畑と河原を突っ切ってから川岸に着く。馬入の渡とは川を渡る部分だけをいうのであれば、渡し場の両脇は馬入村だったということになるのである。

『風土記稿』がまとめられたのは天保十二年（一八四一）だから、明治十五年の地図の約四十年まえであり、川の様子は大きくは違ってはいないであろう。にもかかわらず馬入の渡を馬入村―中島村間としたのはなぜだろうか。

『平塚市　須賀の今昔』三八頁に、「相模川の東に飛地があった。茅ヶ崎市中島、今宿、平太夫新田、萩園に接したところで彦右衛門新田といい、九町四段八畝二十歩あった。」とある。明治十五年の地図に見える、中島村境から川の流路までの間にある畑や荒れ地や、流路の中にある島を開いて新田にしたものであろう。これらの土地のほとんどは、今は流路の中になっている。この彦右衛門新田を越えた西側に渡し場があったのなら、渡し場はやはり馬入村内にあったことになるのである。

『風土記稿』馬入村の項（雄山閣版二巻三五三頁）に「（馬入村の）北方に東海道古往還と称する小径あり、幅二間（約三・六㍍）、往古は今の渡より、五町（約五四五㍍）ばかり川上を渡りて往来せしといい伝う」とある。そしてこの「古往還」が以前の東海道であったと記している。これに対応して川の東側の渡しの位置も変わるということは、必ずしも無くても通るが、この伝承に対応する話が東側にも伝えられていないものかどうかは調べる必要があると思われる。

（平野文明　平成三十年八月十九日記）

37　中島の政治家

衆議院議員

磯崎貞序

明治二十三年（一八九〇）、磯崎半十郎の長男として中島一三〇八番地で生まれた。

昭和二年（一九二七）～同六年（一九三一）まで一期四年高座郡議会議員、神奈川県議会議員も三期つとめた。昭和二十二年（一九四七）に衆議院議員に当選、一期つとめた。昭和五十九年（一九八四）没。

加藤万吉

大正十五年（一九二六）中島一三四番地で生まれ、鶴嶺小学校、神田電気学校を卒業の後、東海電極茅ヶ崎工場に入社、組合運動に参加。昭和二十五年（一九五〇）総評結成に参加し太田薫総評議長の下で総務部長をつとめた。昭和四十二年（一九六七）衆議院議員に初当選し、平成八年（一九九六）七月まで通算八期つとめた。日本社会党では、中央執行委員として国際局長や組織局長などを歴任した。平成二〇年（二〇〇九）九月、八二歳で没。

茅ヶ崎市長

根本康明

昭和九年（一九三四）中島生まれ。（住所　中島一五一）。鶴嶺小学校、県立湘南高等学校を卒業後、家業の農業に従事。県立茅ヶ崎高等学校ＰＴＡ会長、茅ヶ崎連合青年団事務局長などを歴任。柾木一策市長が引退した昭和五八年（一九八三）の市長選で、日本社会党と新自由クラブの推薦、湘南地区労働組合連合や農業団体の支援を受けて立候補し、加藤勇氏を僅差で破って当選した。平成十一年（一九九九）まで四期一六年間つとめた。平成二十九年（二〇一七）十一月八三歳で没。

茅ヶ崎町会議員

磯崎半十郎（中島一二二四）

中島生まれ。明治四十年（一九〇七）～昭和二年（一九二七）まで五期つとめた。鶴嶺村長、高座郡議会議員、神奈川県議会議員も二十年間つとめた。大正九年（一九二〇）三月没。

根本安太郎（中島一五一）

中島生まれ。昭和六年（一九三一）～同十四年（一九三九）まで二期八年つとめた。昭和二十六年（一九五一）六月没。根本康明元茅ヶ崎市長は安太郎氏の長男。

石原初太郎（中島一三一一）

中島生まれ。昭和十四年（一九三九）～同二十二年（一九四七）まで二期八年つとめた。昭和三十二年（一九五七）一月没。

茅ヶ崎市議会議員

数田春吉（中島二四七）
中島生まれ。昭和二十二年（一九四七）～同二十六年（一九五一）まで一期四年つとめた。昭和五十三年（一九七八）十一月没。

根岸金蔵（中島二五一）
中島生まれ。昭和二十六年（一九五一）～同四十二年（一九六七）まで四期十六年つとめた。昭和四十八年（一九七三）十月没。

大森友次郎（中島一一八）
中島生まれ。昭和三十年（一九五五）～同四十六年（一九七一）まで四期十六年つとめた。市議会議長をつとめた。昭和五十三年（一九七八）没。

楳田世高（中島一〇〇四）
中島生まれ。昭和四十二年（一九六七）～同五十八年（一九八三）まで四期十六年つとめた。市議会議長をつとめた。平成十七年（二〇〇五）九月、八五歳で没。

羽切信夫（中島七七八）
静岡県駿東郡片濱村生まれ。昭和四十六年（一九七一）～同六十二年（一九八七）まで四期十六年つとめた。市議会副議長をつとめた。

清水洋一（中島一二九九）
中島生まれ。昭和五十年（一九七五）～同五十八年（一九八三）まで二期八年つとめた。

根岸忠蔵（中島二四九）
中島生まれ。昭和五十八年（一九八三）～平成十六年（二〇〇三）まで五期二十年つとめた。市議会議長をつとめた。平成十七年（二〇〇四）十一月七八歳で没。

古田久栄（中島七三七）
新潟県生まれ。平成七年（一九九五）～同十五年（二〇〇三年まで二期八年つとめた。

鈴木一幸（中島一〇九二）
中島生まれ。平成十五年（二〇〇三）～同十九年（二〇〇七）まで一期四年つとめた。

（羽切信夫記）

47　中島親水公園

明治十九年編纂『国誌下調』の中島村の項（『茅ヶ崎地誌集成』一四八頁）に、村の南部は平坦で「相模古川」が中央を流れているとあるのは、「大川」のことと思われます。この流れは中島の字中河原から字丸島を経て、関東大震災のころまでは字大川淵で相模川の川跡に落ちていたようです。

中島の伊藤光昭さんなどが古老から聞いた話では、この相模

古川は、関東大震災（大正十二年・一九二三）による地盤隆起などにより大川淵付近の深さ、三・六メートルもあった水路が埋まって、細々とした流れになってしまったとのことです。今は、この水路の大部分が暗渠となり、親水公園の地域のみが地上に現れているようです。

茅ヶ崎市建設部公園緑地課に問い合わせたところ、親水公園は東西約一五メートル、南北約九〇メートル、面積は一三三〇平方米です。この水路に名前はないそうです。

樹木は、山桜、柳など約五〇本が生えています。水は少しありますが下流の湘南シーサイドカントリー倶楽部ゴルフ場の池に暗渠を通して緩やかに流れているようです。ザリガニや小鮒等がいます。トンボや蝉などの昆虫も生息しています。公園の東側と西側は畑で、大根・葱・小蕪などが栽培されております。北側は住宅地で二階建ての民家が建っています。南側は約六メートルの道路で、その先はゴルフ場の土手になっています。

親水公園の整備と憩いの場づくりとして、中島自治会役員と中島親水公園愛護会会員等約二〇人で毎月第一日曜日に除草・枝切り・通路整備等を行っています。さらに毎年十二月には参加者や住民の交流と親睦を図るため、感謝祭を親水公園内で約三〇人くらいが参加して開催しています。

毎年一月十四日、中島自治会主催でどんどやきを行っています。参加するのは、本宿とブドウ園地区です。参加者は子供から高齢者まで延べ百人くらいで、参加した子どもたちには蜜柑や焼き芋が配られています。団子づくりは中島自治会館で中島婦人会が指導して作っています。

（羽切信夫　二〇一八年八月十五日記）

「むら」を知る手がかり

小川　正恭

はじめに

茅ヶ崎市域やその周辺地区の歴史を学ぶ機会がしばしばあり、江戸時代の村の文献資料にあたらざるを得ないことがあるが、私は古文書などに取り組む訓練は受けていない。

そこで、専門家による分かりやすい解説書などを探すことになる。市内の村なら、まずは神崎彰利著『ちがさきの村とお殿さま　―村がささえた旗本たち―』（書誌データは文末に掲げた。以下同じ。）に頼る。本の表題通りに、誰が村の領主であったかや村の支配のあらましを読み取ることができる。同じ執筆者による「茅ヶ崎地域における近世の領主たち」で補充し、『新編相模国風土記稿』なども併せて読んで見る。後は、その時々で、手許にある文献にあたったり、図書館で資料を探したりと、全くの素人による無謀な「むら」との取り組みを始めることになる。

その中で相給村の運営が具体的にどうなっていたのかは、気になっていた問題の一つであった。そこで、この相給に関連する参考書などを取り上げてみた。

専門家向けではなく、しかも、きちんと書かれている手頃な文献と思われたので二年ほど前になるが、求めたのは岩波新書の水本邦彦著『村　―百姓たちの近世―』と、角川文庫の渡辺尚志著『百姓の力　―江戸時代から見える日本―』の二冊だった。読み始めると、私に取っては取りかかりやすく、しかも、これまでの断片的な知識を江戸時代の村の全体像に位置づけてくれるたいへんにありがたい本であった。以下に、これら二冊（以下、文献名は略記する）を読みながら気付いたことなどの一部を記しておく。

二冊は江戸時代の村を異文化として観察している

渡辺尚志著『百姓の力』

「本書はくずし字読解の一歩先、すなわち古文書を読んで村や地域の歴史を調べ、研究してみようとする方々の参考に」（九頁）書かれている。頻繁に出てくる事例の多くが南関東や信濃国であることも本書の特色の一つであり、これは茅ヶ崎の住民には有り難いことである。後述するが、水本邦彦著『村』が近畿地方の事例を多く扱っているのと対照的である。

古文書をしっかり読む他に「実際に村を歩き、地図と見比べて地理的環境を確認する、江戸時代に造られた建物や、墓碑・石地蔵などの石造物、書画などの美術品を調査する、今も伝わる民俗行事を見学する、お年寄りから聞き取りをする」など多様な方法を合わせ用いることが重要だという指摘（一一―一二頁）にはうなずかされた。

調べる意義は、

○現代の暮らしは江戸時代の社会の特質を深いところで受け継いでいると認識して、今を生きる私たち自身を知ること。

○かつて存在し、現代では失われてしまったもののなかから価値あるものを救い出し、未来において再生させること（一四―五頁）。

だと述べている。

この二点目を著者は、江戸時代という鏡に現在の問題点がくっきりと映し出されるし、その時代が適度に遠くあるので「現代とは異なる《異文化社会》としての一面を持つ」とも表現している。

各章の内容にまで立ち入る余裕がないので、ここではタイトルを羅列するだけとするが、どの章も魅力的なものである。

一　江戸時代の村と現代社会、二　なぜ村に古文書が大量に残されたのか、三　村はどのように生まれたのか、四　土地は誰のものだったのか、五　山野はだれのものだったのか、六　年貢はどのように取られたのか、七　村落共同体とは何か、八　領主は村とどう関わったのか、九　村と村はどう結び合ったのか、十　村人の世界はどこまで広がっていたのか、十一　村はどう変わっていったのか、おわりに―近代への展望

次の文献との関係で、一言だけ付け加えておく。私が「百姓の力」を読んだのは市内に見られる相給村の支配はどう実行されていたのかを知りたかったからである。だが、「関東や幾内では、村が複数の領主の領地（知行地）に分割されている相給村落が広範に存在しました。この場合、村のなかに知行地ごとのまとまり（知行所村）も存在することになり、村内部の結合関係はさらに複雑になっていました」（七章一五七頁）とあるだけで、細かな実態までは言及されていなかった。しかし、支配関係が錯綜し、比較的頻繁に領主の交代が起こった関東や幾内では、村役人層がそのような事態にたいへんスムーズに行政的に対応できる、高い能力を身につけていた（九章一九七頁）との指摘には大いに興味をそそられた。

水本邦彦著『村　百姓たちの近世』

まず、全七章のタイトルを列記する。

はじめに、一　村の景観、二　村の成立、三　百姓と領主、四　暮らしと生業、五　開発と災害、　おわりに

「はじめに」では、現代の私たちにとって、「村」がいかに縁遠い存在になっているかが確認されている。一八世紀に近世の日本の村を目にした異国人は、ヨーロッパの視点から日本を異文化社会として観察している。一方私たちは、江戸時代にさかのぼってその社会を見ることにより、「独自の価値を持つ別個の世界としてこの社会（村）を眺める立場」（あとがき二〇八頁）、すなわち「新鮮な異文化の社会」として村を観察すると述べている。著者は、近世史研究のこの大きな転換は「なによりも、村から離れた都市文化のなかで生まれ育った若者が研究の担い手になったことが大きな原因だろう」（二〇七―八頁）と説いている。

近世の村を異文化の社会と見る点は、渡辺尚志と基本的に同一の視角であるといってよい。歴史の研究者がここまで柔軟に研究方法に踏み込んでいるとは、私にとっては驚きであった。文化人類学的な視点を果敢に取り入れてきた中世史の研究動向に連動しているように思われた。

「第三章　三　相給村から」（一〇三―一一五頁）を読んで。

第一章で、

近世の村々は石高制と村請け制の原理で領主支配を受け

ていたが、本州中央部には、「幕府直轄領や旗本領、天皇・公家・寺社領、他国大名の飛び地などが入り組み、また、一村が複数の領主に分有される地域があちこちにあった」（三七頁）。そして領主と村はこの状況にきちんと対応できていた。

と前述の渡辺の指摘と同様のことが明確に述べられている。

三章では、近江国野洲郡安治村（現滋賀県）の根来氏領を事例に、その対応の実態を簡潔に示してある。安治村は近世前期に二給（幕府、淀藩）、後期には四給（淀藩、三上藩、旗本根来氏、旗本板倉氏）であり、また根来氏は同村を含め大和国と近江国に十七村を領有していた。安治村だけでも根来氏の支配はきわめて面倒そうにみられる。

安治村の絵図には根来氏領の田畑も、同氏に属する家々もそれぞれ村内のあちこちに散在する様子が描かれている。村の田畑・屋敷・家が各領主に宛がわれた石高に相応して分有されていたからである。つまり、領地領民はまとまった村域を形成してはいない。「相給村は全国どこでも領主の数に応じて村役人組織が作られ、年貢の徴収も、宗門改や五人組編成も各領主ごとに行われていた（一〇七頁）。しかし、領地領民の分散状況から考えれば、領主にとって、「相給領主の村は、じつは実態のともなわないフィクション」であった。個々の領地だけで生産活動は成り立つはずがなく、「根来氏領安治村という単位は、実際の農業経営や百姓生活とはむすびつかない帳簿上の村だった（一〇八頁）」と著者は解読するのである。さらには、これは相給村だけでなく、公儀領主全般にあてはまる支配の特色とも言えると付け加えている。

では田畑・屋敷・家と領民の分割は、実際にどう行われたか、を山城国相楽郡鹿背山村（現京都府）の事例で分析している。

同村は公家の一条家の領地であったが、後に分割され同家領と御蔵入（幕府直轄領）の相給村になった。その際の分割操作を記した帳簿（高分帳）によれば、例えば百姓茂兵衛は、その持ち高を二人の領主（一条家と幕府領）の領地高の比率に対応させて二分していたが、家としては一条家に配属された。百姓治兵衛も持ち高を同様に分割したが、家としては幕府領とされた。また、例外的だが、わずかな持ち高の百姓半四郎は所持地も家も幕府領に配分されていた。鹿背山村の一〇八名の百姓をこうした方法で分けて、村全体としての石高と各領主の領地石高に対応させていたのであり（一〇九頁）、本来の村のまとまりの中での暮らしは続けられた。

この分割にはいくつかの方法があったようだが、いずれも「当該村の意向に沿う形で実施されていた」のであり、「相給村における日々の生産活動や生活は、百姓たちの作る本来の村のまとまりのなかで」（一〇頁）行われていた。相給領主がそれぞれ支配する知行分は、本来のむらのまとまりなしには成り立たない性質のものだった。

なお著者は、これに、この村単位のまとまりを越えて領主の権力が発揮される分野として、広域的な水利土木事業や裁判行政などがあるとの但し書きを付け（一一二頁）、第三章のおわりの部分で、村の暮らしの維持に努める百姓側と、領域の安定支配をはかる領主側の関係を論じ、「依存とせめぎ合い」の両側面をもって展開していた（一二三頁）、と締めくくっている。

この部分との比較では、神崎著『ちがさきの村とお殿さま』で、財政難に陥った市内甘沼の堀氏に対しその知行地三カ国、七ケ村の村役人が寄り集まり、作成した堀氏の家政改革案の紹

介（「甘沼村地頭　堀氏」　「堀氏の家政改革」）（三一―三三頁）がおおいに参考になると思われる。

おわりに

以上に記したことが果たして茅ヶ崎市域やその周辺の村々の近世の様子を知るのにどれほど参考になるかは、正直にいってよく分からない。しかし文献等に接する際に近世の村、とりわけ相給の村の内部事情に関する記載があれば気を付けて読もうと改めて思った。皆さんからいろいろとお教えをいただきたい。

参考文献

神崎彰利　一九八五―一九八七　「茅ヶ崎地域における近世の領主たち　一～三」（『茅ヶ崎市史究』九―一一号（茅ヶ崎市史編集委員会）
神崎彰利二〇一三　『ちがさきの村とお殿さま　―村がささえた旗本たち―』（茅ヶ崎市史ブックレット　一五）茅ヶ崎市（茅ヶ崎市史編集員会）
水本邦彦　二〇一五　『村　百姓たちの近世』（岩波新書一五二三　シリーズ日本近世史②）岩波書店
渡辺尚志　二〇一五　『百姓の力　江戸時代から見える日本』（角川ソフィア文庫一三一―一）発行：株式会社KADOKAWA
（初版　二〇〇八　『百姓の力―江戸時代から見える日本』柏書房）

史跡・文化財めぐり報告

第二八七回　茅ヶ崎市内の別荘めぐり

その第一回「高砂緑地から中海岸へ」

源　邦章

平成三〇年五月二〇日（日）　参加者二一名

平成三十年度の史跡めぐりは、茅ヶ崎市内の別荘地めぐりです。その背景には過去三年間「相模国延喜式十三社めぐり」「相模国の修験道の聖地を訪ねて」「鎌倉と小田原を訪ねて」と県内の史跡をめぐって来ました。その間補助的に、市内の史跡めぐりを追加してめぐりましたが、そろそろ茅ヶ崎市内に目を向けるべきだという意見がありましたので、「市内の別荘地めぐり」を計画しました。

市内の別荘地の特色を簡単に述べてみたいと思います。残念ながら湘南の別荘地としては後発地域となっています。その最大の原因は明治二〇年（一八八七）に横浜―国府津間に東海道線が開通しましたが茅ヶ崎には駅が出来ず、藤沢駅の次は平塚駅になってしまいました。それ故大磯、国府津、藤沢（鵠沼）、そして鎌倉、逗子、葉山に別荘地が先行しました。先行別荘地における保有メンバーは①医師グループ、②薩・長・土・肥等明治維新の勝ち組、③岩倉使節団の参加者、④

財閥系の当主、⑤皇室・華族のグループ等々でした。茅ヶ崎では茅ヶ崎駅の開設に向けて請願し、その結果明治三一年（一八九八）に駅が開設されると同時に、時の茅ヶ崎村長伊藤里之助等が別荘誘致を推進しました。それ以前に外国人エメー・コイが柳島に、須田経哲が現共恵に、九代目市川團十郎が小和田に別荘を構えていました。開設後は土方久元を始めとする内務官僚グループが共恵地域に、そして川上音二郎が高砂に別荘を構えました。明治三八年（一九〇五）の日露戦争勝利による高級軍人への恩給支給があり、また他地域より地価が安価だったため、別荘進出に拍車がかかり、明治末年頃には別荘は二〇〇を超える軒数となりました。その時点では箕作一族、古河村、石川村等のグループが別荘地へ参入、文字通りその後の茅ヶ崎の文化の発祥地となりました。

今回の別荘地めぐりの特色は、従来の史跡めぐりとは違い先ず巡る対象の殆どが現存せず、跡地めぐりとなること、そして別荘人には有名人もいれば無名の人も多数いますので、事前に別荘人の紹介をするという試みをしました。当日九時一五分に図書館に集合して、一時間程別荘人の紹介をしたあと、一〇時二〇分ころから別荘めぐりに出かけました。今回の目玉は土方別荘跡を中心とする内務官僚グループの別荘群と川上音二郎・原安三郎の高砂緑地の二か所でした。

別荘人の紹介を終えて図書館を出発、まず西方に向かいました。右にカトリック教会を見た左側が①野中別荘跡です。野中到は明治時代、日本気象学会の草分け的存在でした。まだ富士山に観測所が無かった時代に、日本一高い場所に観測所を設ければその後の気象学に必ずや貢献する筈だと確信して、妻千代子と共に越冬観測を開始するため富士山に登りま

共恵通りにあったサザン神社

大先輩川添隆行氏は明治時代の三大冒険家として、南極探検した。しかし高山病と栄養失調になり下山を余儀なくされました。この二人を救出することが社会問題となったとの事でした。

それ以後富士山に本格的な観測所の建設がなされるようになりました。我が茅ヶ崎郷土史家の白瀬中尉、シベリア単騎横断の福島大将と共に三人目としてこの野中到を挙げていました。図書館から野中別荘跡の脇を通り進みますと、②土方別荘跡から⑤山崎別荘跡まで茅ヶ崎の初期別荘群跡地が続きます。土方別荘の創設者土方久元は、土佐出身ではありますが脱藩して長州閥として活躍、維新後は宮内大臣として内務官僚の中心人物となり、茅ヶ崎の別荘推進に大きく貢献して行きました。その後、内務大臣の③清浦奎吾、県知事歴任の④清棲家教、同じく県知事歴任の⑤山崎直胤が続き、内務官僚グループを形成しました。その後茅ヶ崎市内日本人初の別荘地所有者⑥須田経哲、この人は佐々木東洋の関連者で、平塚の杏雲堂医院と競合した高田畊安は南湖院開設時、この須田経哲に挨拶をしています。次いで名古屋を地盤とする衆議院議員⑦堀部別荘跡を見て、明治・大正・昭和の三代にわたって外務大臣となった⑧内田康哉の別荘跡を通り、図書館隣接地⑨高砂緑地に着きました。高砂緑地は明治三五年（一九〇二）川上音二郎と貞奴がヨーロッパから凱旋して、音二郎が崇拝する九代目市川團十郎が茅ヶ崎に別荘を持っていたので、茅ヶ崎に別荘を取得、「萬松園」と名付けました。現在緑地内には二〇一一年の記念碑（川上音二郎没後一〇〇年、川上貞奴生誕一四〇年として建立）と、音二郎・貞奴時代の井戸枠が現存しています。明治四四年（一九一一）音二郎が死亡、貞奴は大正八年（一九一九）原安三郎に売却しました。原安三郎は貞奴の土地に加えその周囲を買収して、現在の高砂緑地の大きさに整えました。関東大震災で旧家は倒壊しましたが、昭和六年（一九三一）に木造二階建て延面積三四七・三四㎡の南欧風建物を完成、「松籟荘」と名付け、翌年には回遊式の日本庭園他を作りました。

昭和五九年（一九八四）茅ヶ崎市が「松籟荘」を買い取り、同年高砂緑地として公開しましたが、主屋が老朽化のため取り壊されたのは大変残念なことでした。現存していれば茅ヶ崎市内の別荘建築の代表的な建築物となっていたものと思われます。その後茅ヶ崎市では平成元年（一九八九）長崎屋会長岩田氏より一億円の寄付を受け、茶室及び書院の「松籟庵」を建設、同庭園内には原安三郎が設置しました芭蕉と一茶の句碑や奈良薬師寺東塔の一〇分の一の三重の塔等があります。またこの緑地内には川上音二郎・貞奴関連の碑などの他に、平塚雷鳥・八木重吉・山田耕筰の文学碑が建っています。美術館の前には「松籟荘」の玄関前庭と塀、タイルや敷石、噴水などが残っており、当時の南欧風の近代別荘建築を今に伝えています。

高砂緑地をあとにして図書館に戻ってきました。ここは⑩牛山別荘跡です。この牛山氏は横浜の実業家というだけで詳しいことは分りません。この別荘地、間口は狭いのですが奥行きは広く、奥に行くと小高い丘になっていて、建物は丘の上に建っていたとの事でした。その隣のＮＴＴから旅館「柳屋」の手前までの広い土地が⑪岡崎別荘跡です。創立者岡崎久次郎はアメリカ製雑貨の輸入販売から始め、国産自転車の製造販売や相模鉄道初代社長を務め、衆議院議員を六期務めた人物です。終戦直後の外務大臣の岡崎勝男はこの久次郎の末子でした。旅館「柳屋」の前で第一回の別荘地めぐりは解散となりました。

第二八八回　茅ヶ崎市内の別荘めぐり

その第二回「共恵から南湖方面へ」

源　邦章

平成三〇年七月一五日（日）　参加者二四名

南湖院とその関連の人々の別荘をまわりました。この地域には三人の偉大な画家の別荘地がトライアングルを形成しています。

図書館に集合し、一時間本日めぐる別荘人を紹介した後、一〇時三〇分に出発しました。今回も図書館から西方に向かいサザン通り（病院道）へ進みました。一〇分ほど歩いて右折、三〇メートルほどで①八木重吉が、結核で入院していた

南湖院を退院後、通院するために借りた家のある所に到着しました。八木重吉は都下の現町田市で生まれ、東京高等師範学校を卒業しました。兵庫県の御影師範学校、千葉県の東葛飾中学校で英語の教師をしていましたが、結核を発症したので南湖院に入院しました。大正一五年五月の入院ですが、七月には退院して自宅療養となり翌年一〇月永眠しました。

病院道へ戻り三〇メートルほど歩きますと②高橋誠一が経営した生泉堂医院跡（現在はマンションが建ってます）、恵泉第一幼稚園跡、そして今でも病院跡の向いに恵泉教会があります。高橋誠一は宮城県の出身、真山青果の新聞記事を読んで南湖院を知り、高田畊安に憧れて明治四二年（一九〇九）に南湖院に入職しました。大正四年（一九一五）に同じ南湖院の医師の土岐美也子と結婚、大正一〇年（一九二一）生泉堂医院を開設、高橋は南湖院と生泉堂を兼務、妻の美也子が生泉堂に専念していました。高橋誠一はその後教育に関心を持ち幼稚園を経営、さらに教会の経営にも参入、戦後は町・市会議員、白十字林間学校校長、平和学園理事、茅ヶ崎医師会会長等を歴任し昭和四三年（一九六八）に死去しました。そこから病院道を三〇メートルほど西へ行った右側には生泉堂医院の最初の開設場所があります。

③発電所跡④南湖異人館跡を過ぎて病院道から分かれ南下しますと旧鉄砲道に出ます。ここに今でも大きな鬱蒼とした屋敷を持っている⑤松岡別荘があります。松岡氏については内務官僚ではなかったかといわれているだけで詳細は不明です。どなたかご存知ではありませんか。このお屋敷の屋敷神が現在「東海岸神社」の御祭神だと言われています（諸説あります）。松岡別荘の隣の三角形の土地に⑥三代目市川段四郎が住んでいました。歌舞伎界の名優で、妻は女優の高杉早苗、長男が現市川猿翁（その前は二代目市川猿之助を名乗っています）、孫が諸事情から歌舞伎界から離れていました香川照之（現在、歌舞伎界では市川中車を名乗っています）、そして猿翁の弟で三代目市川段四郎の長男が三代目市川猿之助を継いでいます（前市川亀次郎時代からテレビのクイズ番組で活躍中）。澤瀉屋。

旧鉄砲道を西に向かって歩き、右側一〇メートル程入った所にあった⑦山田耕筰の借家に着きます。山田耕筰は日本で初めて交響曲を作曲し、交響楽団を設立しています。しかし人間関係のもつれから、交響楽団は解散に追い込まれ多額の借金を背負い、東京から逃れて茅ヶ崎のこの地で借家住まいを始めました。茅ヶ崎を癒しの場としたのです。茅ヶ崎内で何度か居を移しながら数年間で童謡等を百曲以上作っています。今でも茅ヶ崎市内には、ここ南湖の「赤とんぼ作曲の地」のプレートがあり、他にも中央公園と高砂緑地に碑があります。そして茅ヶ崎市の防災行政用無線では「赤とんぼ」の曲が夕方流れています。

旧鉄砲道を抜け八雲神社の境内を通り南下すると、⑧萬鉄五郎の別荘跡に到着します。この日は、三人の有名な画家の別荘地をめぐりました。萬と⑪速水御舟と⑫小山敬三です。期せずして三人の偉大な画家が萬を頂点としてトライアングルの形を成して別荘地を持ったという事は、この茅ヶ崎が暮らしやすく、創作意欲をかきたてた場所だったと言えましょう。あまりにも有名なこの三人についてはコメントを差し控えます。

萬別荘跡の次は⑨伴田別荘と⑩大沢別荘が隣り合っています。伴田別荘の創設者伴田六之助は日本橋の実業家で株屋とのこと、その子息が友田恭助です。友田恭助は、前回歩いた土方久元の孫の土方与志と「南湖座」を立ち上げ、近所のおばちゃん連に芝居を見せていました。それはその後「築地小劇場」や「文学座」に繋がって行きましたが、惜しくも恭助は戦地で亡くなりました。大沢別荘の当主は伴田六之助の親戚との事ですが詳細は不明です。恭助が南湖座を立ち上げたとき、大沢家の何人かが参加したと書かれたものもあります。このあと前述しました速水御舟、小山敬三の別荘跡をめぐり、西浜小学校の前に出ました。この小学校の北部分に短期間ではありますが、⑬家庭学校というものがありました。創設者は留岡幸助という社会福祉運動家で、家庭学校とは非行少年（感化院や少年刑務所を出た）を引き取って教育しようとするボランティアの団体との事です。

ここからさらに西へ進むと西浜中学校の側に南湖公民館があり、休憩を取りました。今年の暑さは半端ない暑さですが、この日もかなりの暑さでした。ここで充分休憩を取った後、北上して住吉神社の南端に出ました。この近辺には⑭平塚雷鳥のゆかりの地が三か所あります。平塚雷鳥の独身時代の下宿先、奥村博史の下宿先、雷鳥・博史の愛の巣の三か所で、それぞれの前で説明をしました。次いで⑮国木田独歩の別荘跡（独歩は「南湖院」に入院しており、その家族が独歩の世話をするために借りた家で、独歩は死亡後この家に運ばれた）を説明しました。残念ながら未だに独歩の別荘跡の位置は確定していません。ほぼ三か所のどちらかだろうと推察されるので、その三か所の位置を説明したに留めました。そこから五分もかからない所に「南湖院」があります。

⑯南湖院は医師の高田畊安が、茅ヶ崎駅ができた翌年の明治三二年（一八九九）に開設しました。当時の日本は富国強兵・殖産興業を進めた結果、急激な都市化により住環境が悪化して結核が拡大していきました。畊安はこの結核から人々を救おうとして南湖院を開設しました。当時の結核は特効薬がなく、栄養と安静、清浄な空気が治癒をもたらすとして茅ヶ崎が選ばれました。開設当初、入院患者はわずか三名でしたが、明治四一年（一九〇八）国木田独歩が入院、その入院の様子を真山青果が読売新聞に「独歩氏の近状を報ずる書」として発表、一躍南湖院が全国的に有名になりました。その後最盛期には五万坪の敷地を有し、ますます発展していきましたが、昭和二〇年（一九四五）に畊安が亡くなると海軍に一部接収され、敗戦後はアメリカ軍に接収され、建物は荒廃し南湖院が再開されることはありませんでした。

当日の余りの暑さと二時間近い町歩きの結果、南湖院の門前で説明したにとどまり、ここで解散しました。最も近いバス停の「団地中央」まで案内して、別荘地めぐりは終了しました。

南湖院　高田畊安の人物関係図

源　邦章

茅ヶ崎の別荘地巡り第二回で最終訪問地は「南湖院」でした。南湖院の概略については別荘地巡りの報告書に記載しま

したが、本稿では南湖院とその院長である高田畊安の人物関係について記してみます。「人物関係図」をご参照ください。

高田畊安は①父増山守正母竹子（旧姓高田）の次男として現在の京都府舞鶴市に生れました。長男は②正道で若くして結核に感染して亡くなりました。兄の死が畊安をして医学の道に進ましめ、更に結核患者撲滅のために後年南湖院を設立します。畊安は兄がいたので、母方の姓の高田家に養子に入り高田姓を名乗ります。医学を志した畊安は京都府立医学校を卒業すると上京し、東京の帝国大学医科大学に入学しました。ここで③医学関係の師ベルツ及び青山胤道に師事します。それ以前京都府立医学校在学中に④キリスト教に強く惹かれ新島襄の同志社教会に通い洗礼も受けました。ここで徳富蘇峰や植村正久とも知己を得ました。二人とは南湖院設立後も関係を保っています。帝国大学医科大学ではのちに競合関係となる⑤佐々木東洋・政吉（杏雲堂は神田でも湘南でも競合、平塚に分院を開設しています。）が先輩にいました。帝国大学医科大学卒業後、畊安は医科大学第一医院勤務となりました。当時医師免許を取得することは大変なことで、医師志望者の今で言う予備校の⑥「済生学舎」が設立され、畊安はそこでも教員として教えていました。医師を目指す人々の内、女性は本当に狭き門でしたので、この「済生学舎」は女性が多く学んでいました。後年、南湖院設立時、畊安はこの「済生学舎」出身の女性医師を多く採用しています。当時女性は医科大学を卒業して医師免許を取得しても就職先が殆どありませんでした。明治二五年（一八九二）畊安は⑦疋田輝子と結婚、輝子は勝海舟の孫で勝海舟はこの結婚に三百円の持参金を畊安に渡しました。この海舟の妻「たみ」が南湖院最初の入院患者三人の内の一人となりました。第一医院勤務中に香港でペストが大流行しました。ベルツ門下の青山胤道と伝染病研究所の北里柴三郎が原因調査のため香港に向かいました。しかし、青山がペストに感染してしまい、本国ではその救出に慰問団を結成、その派遣医師を募りました。その時畊安は率先して志願、現地に向かい青山も無事回復して帰国しました。畊安の勇気が全国的に称賛されました。明治二九年（一八九六）畊安は神田駿河台に東洋内科医院を開業しました。さらに明治三二年（一八九九）茅ヶ崎に南湖院を開設しました。

南湖院開設から日本海軍の接収により病院の役割が終わるまでの医師・女性医師・事務員について記してみたいと思います。⑧男性医師については林止（とどむ）と高橋誠一の二人が副長としていました。林止は南湖院の副長の期間は二年半でしたが、その後東洋内科医院や白十字林間学校の校長を務め、畊安との関係は続いていました。高橋誠一については別掲「史跡巡り」で詳しく記載しております。⑨女性医師については「済生学舎」にて女性医師を目指す人々に畊安が講義をしており、それが廃校になると吉岡弥生が「東京女医学校」を設立しました。畊安はそこでも講義をしています。南湖院が開設されますと、全国で初めて女性医師を採用しています。開設初期から最後までに五人の女性副長と三人の女性医師の名前が挙がっています。石坂蓮子・河野桃野・前田園子・高野直子・中村愛子の五人の副長と土岐美也子・辰巳勝枝・塚原雄子の三人の医師です。特に河野桃野は一時離れていましたが、南湖院が終わる昭和二〇年（一九四五）まで勤

務していました。そして河野は昭和一八年（一九四三）に畊安と共に結核撲滅事業に尽くしたとして、皇后から表彰され下賜品を授与されました。土岐美也子は高橋誠一と結婚して生泉堂医院を開業しています。中村愛子は気難しい国木田独歩が入院した際の担当医として、独歩の治療に専念しましたが、独歩の死後四か月目に虫垂炎が手遅れになり、腹膜炎で亡くなっています。南湖院の⑲事務員については分っている範囲では、八木重吉の妻とみと平塚雷鳥と「青鞜社」を立ち上げた保持研（やすもちよし）がいます。保持は自身が結核に感染し南湖院に入院、その費用を捻出するために事務員として手伝っていました。

南湖院の入院患者については、⑪文学者としては、国木田独歩の入院と死について真山青果が読売新聞に『独歩氏の近状を報ずる書』を掲載することで、南湖院が全国的に有名になりました。小説家としては前述の国木田独歩・坪田譲治そして『大菩薩峠』の中里介山、随筆家の森田たまが入院しています。詩人では八木重吉・大手拓次、歌人には吉井勇・岩谷莫哀です。また、前田夕暮の長女や石川啄木の次女が入院したことによって、それぞれが南湖院について書いています。また葛西善蔵は友人が茅ヶ崎の病院に肺病のために入院している様子を書いています。

⑫音楽関係では無名時代の吉田千秋が入院しています。吉田千秋は東京農業大学予科に入学するも健康不安になり、南湖院に入院しました。南湖院入院が千秋にキリスト教へ眼を向ける事となり、音楽に関心を持つようになりました。歌詞だけだった讃美歌に曲をつけ、五線譜に記録するというように作曲に目覚めました。退院後、英詩に曲をつけ「ひつじぐさ」として発表、それは大正四年（一九一五）のことでした。この曲に大正六年第三高等学校二部水上部クルーが琵琶湖周航時今津の宿で、部員の小口太郎が作詞、「ひつじぐさ」の曲を付けて歌いました。勿論千秋はそれを知る由もなく大正八年にその生涯を閉じました。この「琵琶湖周航の歌」は戦後加藤登紀子が歌い大ヒットしました。

⑬科学者では岡崎文吉がいます。岡崎は岡山県出身ですが札幌農業学校卒業後北海道庁へ入庁。石狩川大水害の改修、中国遼河の改修に貢献して河川改修の第一人者とされた人物です。⑭実業家には小山房全、この人は現長野県上田市で生まれ、小諸の大製糸工場純水館の経営者小山久左衛門の娘婿となり、南湖院入院後茅ヶ崎に別荘を所有しました。大正六年（一九一七）に最新設備を備えた大工場の茅ヶ崎純水館を設立、茅ヶ崎に多大な貢献をしました。関東大震災で工場全壊の大打撃を受け、その後事業は再開しましたが、生糸市況不振の中で昭和一二年（一九三七）茅ヶ崎から撤退しました。大井新は南湖院にて療養後、院内測候所長として勤務し、病院が閉鎖するまで勤続しました。その間明治四〇年（一九〇七）北口駅前に大井写真館を開業、茅ヶ崎の写真館の草分けとなりました。南湖院の絵葉書や官公署・学校・一般家庭の記念写真等はほとんど大井写真館によるものとの事でした。昭和五〇年（一九七五）北口駅前整備により現在の南口に移転しました。⑮教育界では柏木義円、杉浦重剛の二人、⑯キリスト教関係では小崎弘道、小山東助が入院しています。

入院患者ではありませんが、南湖院に関係する二つのグループに言及しない訳にはいきません。それは⑰平塚雷鳥の関

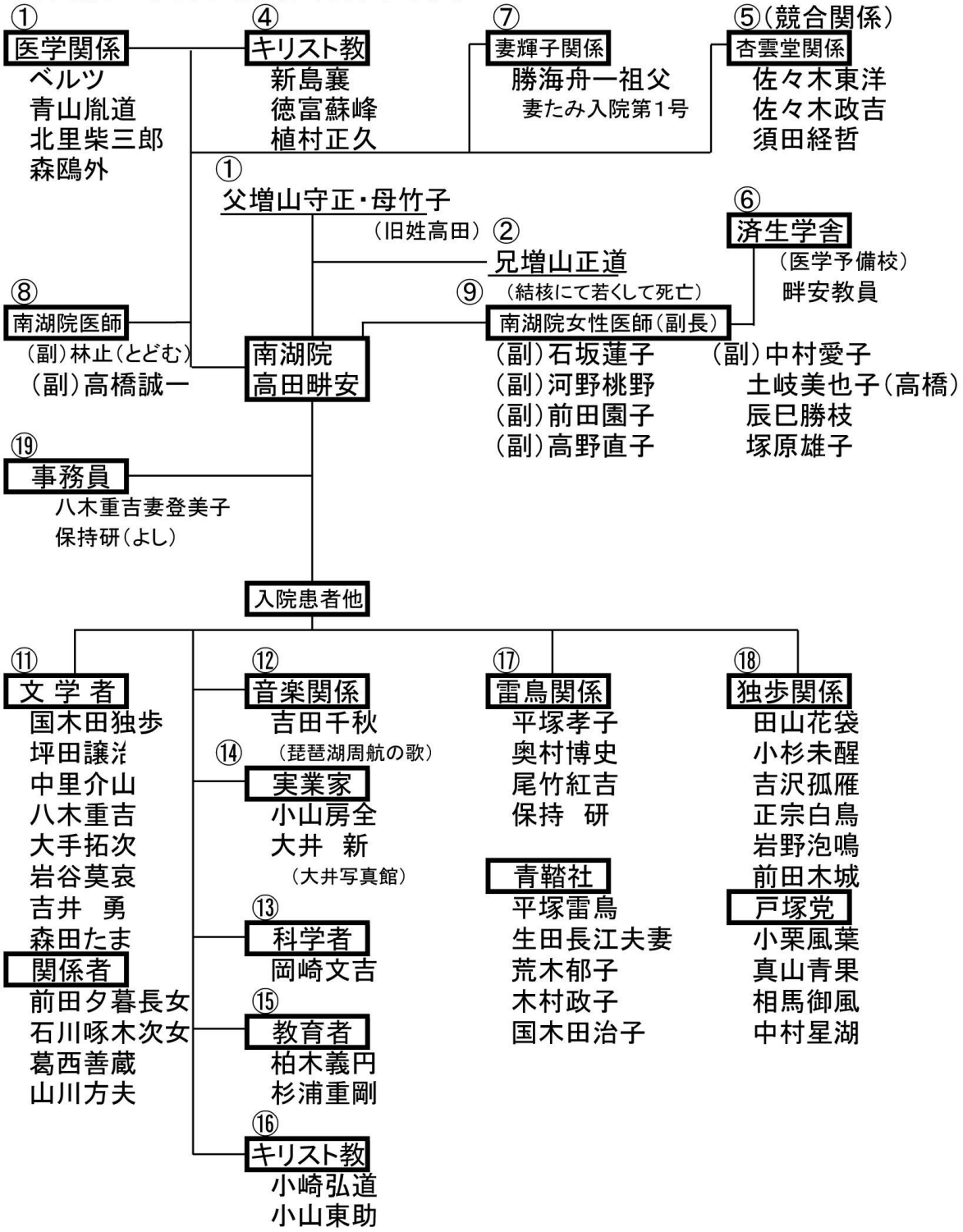
係者と⑱国木田独歩の関係者です。平塚雷鳥は姉孝子が南湖院に入院しているので、その見舞いにしばしば訪れました。保持研、尾竹紅吉も南湖院の関係者です。雷鳥にとって決定的なことは、南湖院で奥村博史と出会った事でした。雷鳥は博史と茅ヶ崎に「愛の巣」を構え、一度博史がいなくなっても再び戻ってきましたので、更に愛が深まったことから五歳年下の博史のことを「若き燕」と呼んだ言葉が、当時大流行したとの事でした。雷鳥は当時女性文芸誌『青鞜』を発行していましたが、雷鳥が茅ヶ崎在住のため、生田長江夫妻、荒木郁子、木村政子などが茅ヶ崎に集合、さながら『青鞜』編集部が茅ヶ崎に移ったと言われる程でした。次いで国木田独歩の関係者ですが、これは独歩が亡くなる前からの確執であったと思われます。独歩の死による通夜とその後の「茅ヶ崎館」での争いから表面化したものでした。その中心人物が田山花袋です。花袋は小栗風葉を始めとする所謂「戸塚党」（小栗風葉の自宅が新宿区戸塚にあり、そこに集まってグループ化している）と言われる真山青果、相馬御風、中村星湖等を嫌っており、真山青果を花袋が独歩に会わせ、独歩の近況を真山に書かせたことを悔いています。また戸塚党の独歩に対する不真面目さに嫌気がさし、独歩の死亡前最後の写真撮影前日、戸塚党の大半が茅ヶ崎館に泊まっているので、花袋や前田木城、岩野泡鳴、正宗白鳥は茅ヶ崎館を嫌って国府津に泊まりました。そして翌日茅ヶ崎館一行と国府津に泊まった花袋一行とで南湖院に赴き、独歩との最後の写真を撮りました。

まだまだ南湖院に入院している人々はたくさんいたと思われますが、現在の資料では別紙「関係図」で示した通りだと思います。今後も更に勉強していく所存です。尚、この「人物関係図」は私が属している「茅ヶ崎郷土会」及び属していた「茅ヶ崎文化人クラブ」の大先輩の名和稔雄さんの図を参考にさせて頂きました。ところがこの資料を集めている最中に、お亡くなりになったという報に接しました。本当にお世話になった大先輩なので残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。

【参考文献】

『茅ヶ崎市史』　第2巻　第4巻　第5巻
『南湖院』高田畊安と湘南のサナトリウム　茅ヶ崎市史ブックレット⑤　市史編集員会
『南湖院と高田畊安』　河原利也　中央公論美術出版
『茅ヶ崎市史研究』２３号　湘南における結核療養所反対運動　大島英夫（以下の文献の著者は大島英夫）
『茅ヶ崎市史研究』２４号　南湖院開設前後の高田畊安
『茅ヶ崎市史研究』２６号　高田畊安と徳富蘇峰
『茅ヶ崎市史研究』２９号　南湖院と女性医師
『ヒストリアちがさき』３号　南湖院と茅ヶ崎ー地元への貢献ー
『ヒストリアちがさき』４号　南湖院の音楽家たち
『ヒストリアちがさき』８号　昭和２０年の南湖院
『ヒストリアちがさき』９号　南湖院と国木田独歩・真山青果

南湖院・高田畊安人物関係図



風　自由投稿欄

浜降祭と海辺

中島幸子

夏の湘南海岸は若者の祭りの場である。ほとばしる若さを見せつけられると、気持ちが一回り大きくなったように感じる。

若者風にいえば、御神体はなくてもいい。湘南海岸に限らず、大勢集まってくるだけで「盛り上がれば祭りだあ」である。うちにある品物を持ってきて店を開いてしまう。あのイージーさであろう。

若者が謳歌するのはかまわないが、祭りにはこだわりがなくてはいけない。伝統の神楽、神輿、山車など郷土の象徴がそろうだけで気分が高揚する。

各地の大祭をテレビジョンでみると気は逸るが、映像が変われば思いは消えている。祭りは熱気の中に自分がなくてはいけないのだ。

「浜降祭」は、毎年海の日に、茅ヶ崎の海で古式に則って行われる厳かな神事である。郷土誌によるとこの祭りの起源は、確かなことは不明とされているが、伝えられている由来がおもしろい。

昔から神に仕えるものは海水で身を清める習わしがあり禊ぎという。鶴嶺八幡社では古くから南湖の浜で神輿が禊ぎを行う習わしがあった。「浜降り」の儀式である。

天保九年（一八三八）寒川神社の神輿が、国府祭（こうのまち）に行った帰り、相模川の渡しで地元の氏子と争いを起こした。折しも増水しており、神輿は濁流に流されてしまった。数日後、南湖の網元孫七が漁に出た折、発見した。以後、お礼参りに毎年地元の神輿と一緒に禊ぎを行っていた。

大正一二年（一九二三）、地元の神社との合意で「浜降祭」と命名し、七月十五日に行うことになった。その後神事のみでなく、近郷の年中行事にもなり、神輿愛好会の交流など活発になったこともあって、平成九年から海の日（七月二〇日）に行うように変わった。（現在の海の日は七月第三月曜日となっている）

祭りの日、東雲（しののめ）が白み始めるころ、神社ごとに神輿を担ぎ南湖の浜辺をめざす。この情景を郷土誌は「暁の祭典」と記している。

海から遠い神社もドッコイドッコイのかけ声をかけ、台座の鐶（かん）をカッタカッタと打ち鳴らし、茅ヶ崎甚句の美声を響かせながら集まってくる。ほの暗さが漂う中、海辺に着いた神輿は穢れを洗い落とす「暁の祭典」を行う。

担ぎ手が海水を跳ね上げてざわざわとなり、神輿の黒塗り

の屋根が上下に動くたびに、金箔の飾りがきらきら光る。水の中の力強い担ぎ手とそれを凝視する砂浜の者が一体になるその様は神々しい。遠巻きに見ているだけで力が入る。間近で見るすさまじい情景は禊ぎの妙味を伝えてくる。

浜辺にしつらえた会場には、一〇メートルもあろうか、篠竹が林立している。それに挟まれるように、同じくらいの高さの幟が海風を受けてゆっくり揺れている。色あせた紫の布地に白抜きで寒川神社、鶴嶺神社、住吉神社…三〇余の神輿が往事を物語っている。

代々受け継いでいるのだろう。長老が中央のやぐらで紹介している。「いまみなさんの前を乱舞しているのは、〇〇神社の一八〇年の歴史をもつ御神輿で、四隅に千鳥がついているのが特徴です。ぶら下がっている黄金の鈴は一つ二キロもあるのです。よくご覧下さい」

呼応して海水をしたたらせた神輿が砂浜を誇らしげに練り歩き、見物人は神輿の動きに合わせてあっちこっちに逃げ回る。しばらくは大騒ぎである。やがて神輿は幟の前の台にゆっくりと収まり、ひととき静かになる。

男衆が担いでいた棒が、塩水を吸い込み木目をむき出しにして夏の日に照らされている。砂浜の大舞台に、笹竹と幟が揃う。子供神輿や女性だけが担いでいた小柄のものも一緒にいるのが愛（いと）おしい。

各地の祭りで、神輿が狭い道を練り歩くのをテレビジョンで見るのは珍しいことではないが、一六〇年間も浜降祭が続いているのは、海辺のステージあってのことだろう。

かつて近郷近在の人気を集めていたと聞いているが、埼玉県や群馬県の観光協会のバスが砂地にのめり込むように駐車しているのを見ると、相変わらず愛好家の関心が高いことがわかる。

古式ゆかしい神輿の乱舞が終わった。気がつけば強い日差しがほほを射している。遅い朝食の時刻になっていた。

海は懐が深い。「暁の祭典」が終わると、砂浜は若者にバトンタッチされる。

キャッチフレーズ「真夏の太陽を燦々と浴びる」にぴったりの湘南海岸である。サーフボードを抱えたり、甲羅干しのマットを持った若者がやってきた。

そういえば、神社名を染め抜いたそろいの襦袢を着た若い衆は胸をはだけて歩いていたが、見物人の中に若い男女を見なかった。

懐かしい「祭り」のロマンは、いまは香っていない。

民俗資料館「旧藤間家住宅」

社会教育嘱託員　**富永富士雄**

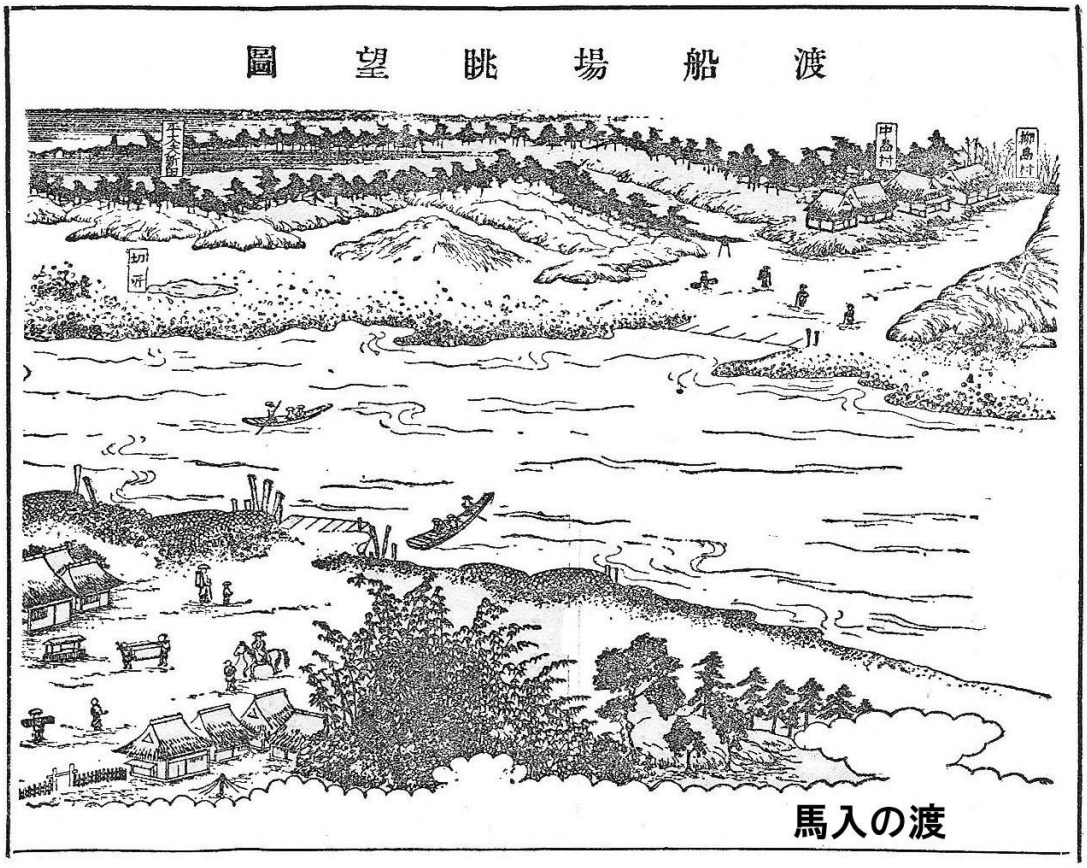
平成二十九年七月二十八日付で、柳島の藤間克子さんより敷地約三九〇〇㎡とその中の建物群および歴史資料などが茅ヶ崎市に寄付されました。

藤間家の主屋は昭和七年に完成され、当時ではまだ珍しい洋風空間を従来の日本建築に組み込んだ住宅です。現在もなお建築時の状態をほぼ残している貴重な建物として、平成二十七年三月に国の登録有形文化財に登録されました。主屋東面の中央に玄関ポーチを置き広めのホールの左手（南側）に洋間（応接間）が配置されています。ホール中央の戸から長い中廊下が西方向に延びて左右に和室が並ぶ和空間が設えられています。外観からも洋風から和風へ移り変わる造りが、ほのぼのとしたなつかしさを感じさせてくれます。

一方、敷地は平成二十五年三月に「藤間家（近世商家）屋敷跡」として茅ヶ崎市の史跡に指定されています。江戸時代には代々柳島の名主を務めた藤間家の歴史は、一四〇〇年代にさかのぼることは間違いないと考えられ、古くは伊豆方面、その後江戸を主とした廻船業を展開していたことが分かっています。当時の建物は残っていませんが、南側と西側に残る石垣や三階建て土蔵跡の土台となる石垣などの遺構群が地中に存在しているほか、敷地内には多数の加工石材や瓦なども積み置かれていて、江戸時代にあった廻船商・藤間家のたたずまいを偲ぶことができます。多くの古文書、書画、民俗資料も伝えられてきました。

また広い敷地内にはタブノキやシロダモ、ニッケイなどの大木やアカマツ、桜、梅などがあり、これらの屋敷林と多くの草花が庭の四季を彩っています。本年は地域で活動されている「柳島いま・むかし会」の皆様のお力添えを頂き、庭の試験的管理を進めています。

民俗資料館「旧藤間家住宅」はこれらすべてから構成されていますが、本年四月十三日より毎週金曜日と土曜日の九時から一六時まで敷地の公開をしています。多くの皆様にご覧頂きたいと思っています。



新編相模國風土記稿卷之四十三　村里部　大住郡之二
雄山閣版二巻

馬入の渡の図

上の絵は馬入の渡である。『新編相模国風土記稿』馬入村の項（雄山閣版二巻三五六頁）に掲載されている。

平塚側の馬入村から茅ヶ崎側を見た風景。向こう岸の奥に人家があって、中島村と柳島村と示されている。江戸時代の末期の様子。この馬入村の項には、馬入村側の渡し場に**川会所**があり、**川年寄**が支配していたと書いてある。このころの渡船賃は一人一五文。寛永通宝一五枚である。荷物を積んだ馬や人を乗せた馬の渡船賃も板に書いて立ててあったそうである。もとより比較はできないが、落語の「時そば」に出てくるかけそばは一六文である。

（平野記）

【編集後記】

「今日も猛暑日です。熱中症にならないように水分をこまめにとって、エアコンを効かせた部屋でお過ごしください。特に高齢者は注意するように」とラジオから毎日聞こえてきました。

「俺は高齢者だが余計なお世話だ。ラジオは東電の回し者か」と毒づきながら、お節介ラジオのいうとおりにエアコンを効かせて、この一四三号の編集・割り付けに没頭しました。

夏枯れの九月一日号かなぁと思っていましたが、たくさんの原稿が集まりました。皆さん、暑い中のご執筆、ご投稿ありがとうございました。「今後の事業予定」は裏表紙にまとめてあります。事業報告は割愛しました。会のＨＰのＵＲＬは http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/「茅ヶ崎郷土会」の検索で見ることができます。

ご意見・ご感想は平野（０９０―８１７３―８８４５）まで。

平成30年度　茅ヶ崎郷土会　年間事業予定

（網掛けは終了した事業）

2018/8/24印刷

		理事会 総会	催し物	（公開事業①） 史跡めぐり	（公開事業②） 市内23ヶ村調査勉強会 【会場　福祉会館及び現地】	会場・収容人数	（公開事業③） 郷土歴史民俗勉強会 【会場　福祉会館】	会場・収容人数	郷土ちがさき　発行
平成30年	4月	理事会 03日 （火）	大岡越前祭「越前守遺跡写真展」 ・総合体育館21日（土）・22日（日） ・民俗資料館旧和田家21日（土）	—	03日（第1火）13:30～ 17日（第3火）10:00～ 室内・中島まとめ 17日（第3火）13:30～ 室内・中島まとめ	集会室2（36人） 集会室2（36人） 集会室5（00人）	—	— —	—
	5月	理事会 総会 18日（金）	・市立図書館 13:30~ （郷土芸能保存協会総会も実施）	20日（日）287回 市内別荘めぐり 高砂緑地から中海岸へ	— 15日（第3火）13:30～ 室内・中島まとめ	— 集会室6（24人）	— 15日（第3火）10:00～ 東哲郎さん「茅ヶ崎の別荘」	— 集会室6（24人）	1日発行 （142号）
	6月	理事会 11日（月）	「茅ヶ崎かるた」かるた大会 ・3日（日）13時～15時 ・松籟庵	—	05日（第1火）13:30～ 室内・中島まとめ 19日（第3火）10:00～ 室内・中島まとめ	集会室6（24人） 集会室6（24人）	— 19日（第3火）13:30～ 名和稔雄会員「南湖院の人々」	— 集会室6（24人）	—
	7月	理事会 02日	—	15日（日）288回 市内別荘めぐり 共恵から南湖方面へ	03日（第1火）10:00～ 中島現地調査 17日（第3火）13:30～ 室内・中島まとめ	現地 市役所コミュニティーホールA会議室	— 17日（第3ヶ）10:00～ 山本俊雄・源邦章会員「両北条氏」	— 市役所コミュニティーホールA会議室	—
	8月	理事会 06日 （月）	—	—	07日（第1火）13:30～ 室内・中島まとめ 21日（第3火）13:30～ 室内・中島まとめ	集会室6（24人） 集会室6（24人）	— 21日（第3火）10:00～ 平野「中島 地名の由来・馬入の渡」	— 集会室6（24人）	—
	9月	理事会 04日 （火）	—	16日（日）289回 市内別荘めぐり 中海岸の鉄砲道から南へ	04日（第3火）13:30～ 室内・中島まとめ 18日（第3火）13:30～ 室内・中島まとめ	集会室6（24人） 市役所コミュニティーホールA会議室	— 18日（第3火）10:00～ 東哲郎さん「箕作一族と柳田国男」	— 市役所コミュニティーホールA会議室	1日発行 （143号）
	10月	理事会 15日 （月）	市民文化祭「鎌倉・小田原めぐりと中島の歴史展」 ・ 9日（火）～13日（土） ・市民ふれあいプラザ（市役所内）	—	16日（第3火）13:30～ 室内・下寺尾	集会室6（24人）	16日（第3火）10:00～ 加藤幹雄さん「団十郎と神道」	集会室6（24人）	—
	11月	理事会 05日 （月）	郷土芸能大会 ・25日（日） ・市民文化会館	18日（日）290回 市内別荘めぐり ラチエンどおり～ゆかりの人物館	06日（第3火）13:30～ 室内・下寺尾 20日（第3火）13:30～ 室内・下寺尾	集会室6（24人） 集会室6（24人）	— 20日（第3火）10:00～ 平野文明会員「お伊勢参り」	— 集会室6（24人）	—
	12月	理事会 03日 （月）	—	—	04日（第1火）10:00～ 下寺尾現地調査 18日（第3火）13:30～ 室内・下寺尾	— 集会室6（24人）	— 18日（第3ヶ）10:00～ 東哲郎さん「伊勢神宮と高野山参り」	— 集会室6（24人）	—
平成31年	1月	理事会 （未定）	—	20日（日）291回 市内別荘めぐり 茅ヶ崎駅から桜道へ	15日（第3火）13:30～ 室内・下寺尾	コミュニティーホールを予定	15日（第3火）10:00～ 平山孝通さん「姥島・烏帽子岩表記の変遷」	コミュニティーホールを予定	1日発行 （144号）
	2月	理事会 （未定）	—	—	05日（第3火）13:30～ 室内・下寺尾 19日（第3火）13:30～ 室内・下寺尾	図書館を予定 図書館を予定	— 19日（第3火）10:00～ 話題提供者 未定 「題　未定」	— 図書館を予定	—
	3月	理事会 （未定）	—	17日（日）292回 市内別荘めぐり 一中通りを東海岸南へ	05日（第1火）10:00～ 下寺尾現地調査 19日（第3火）13:30～ 室内・下寺尾	— 図書館を予定	— 19日（第3ヶ）10:00～ 話題提供 源会員「茅ヶ崎の別荘跡をめぐる　まとめ」	— 図書館を予定	—

★実施日・場所・テーマなどは変わることがあります。お問い合わせは　源邦章（08067843088）　山本俊雄（09061742806）　平野文明（09081733345）
★公開事業①「史跡めぐり」 集合は午前9時15分、市立図書館（11月18日のみゆかりの人物館）、雨天のときは一週間後の同じ曜日・時刻に実施します。その日も荒天の場合は中止します。
★公開事業② 「23ヶ村調査勉強会」の対象村・実施日時は変更することがあります。
★（公開事業①③）は、資料代等として会員200円、会員外は300円をご負担願います。また②も含め必要経費が生じた場合は会員・会員外を問わず臨時徴収することがあります。
★（公開事業②③）は、ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会との共催です。
★交通費・食事・傷害等は各自対応してください。